

き台として考えた小テーマ、およびその第一次的デッサンである。公表するに値するものではまだないが、私たちのグループの実践の足跡として、また内部的討

論および興味・関心をお持ちの方々からの御批判、御示唆を仰ぐための資料として掲載するものである。(以下は提出順)

2. 高校三年生を対象にした 総合学習の構想

徳井輝雄

1 はじめに

高校普通科の教育はともすると大学入試準備の傾向にのみ、教師も生徒も父母もとらわれがちである。受験準備とは別の側面——即ち生き方を学ぶための一つの方策として、われわれは総合学習を提起し一定の実践を積み重ねて来た^①。その中で今後の課題として高校三年間の学習を受験とは違った立場からまとめ完成させる必要性のあることを指摘した。以下はその具体的構想の一つである。

2 総合学習のテーマ

高校生に研究してもらいたいテーマとして次のようなものが考えられる。

(1) 平和の探求

どうして戦争は起こるのか。現在日本は、米ソの核戦略体系の中でどのような立場に置かれているのか。核戦争がもし起こったらどのような事になるのかをヒロシマに落された原爆の威力から推測してみる。

(2) 現代日本の諸問題

公害、核戦争の危機、教育問題……これらの根底にあるものは何かをさぐっていく。

(3) 現代科学体系の諸特徴

合理主義の変質・数量化数式化のもつ問題点、それらを支える価値観は何かを探ぐる

(4) 現代社会の疎外について

人間疎外をもたらすものは何かを追及する。

(5) 人間の認識の深まり方

人類の自然観の深まり方と、人間個人の認識の深まりについてみていく。

これは科学技術史の学習にもなる。

3 授業内容

以上述べたテーマは関連や重なりがある。それらを高校三年の選択の授業として展開するために次のような素案を提示する。

総合テーマ 「科学技術と人間」

[1] はじめに

「われわれは学校で諸科学の基礎となるいろいろな教科を学んでいるが、いったい何の為に学ぶのかを考えて欲しい。われわれは新しい科学技術の創造に努力しなければいけない。新しい科学技術体系とは、戦争を避け恒久平和をこの地球上にもたらすのに耐えうるものでなくてはならない。これが、われわれに課せられた課題であり、この課題の解決の為に学ぶのである。」という事を力説する。

[2] 現代科学技術の特徴

2-1 現代科学技術のもたらしたもの

公害、戦争など人間疎外

新聞記事等時事的な題材を扱う

2-2 利潤至上主義のもたらしたもの

人間観の非人間化……一面的能力主義、棄老
価値観の金銭化 ……木下順二の夕鶴

尾崎紅葉の金色夜叉

などが題材となろう。

労働の非人間化 ……チャップリンのモダン
タイムス等を見る。

教育観のゆがみ ……投資としての教育とは。
専門化、選別化のゆ
すぎ。

[3] 科学技術の思想的背景

3-1 ヨーロッパにおける初期ブルジョワジーの思想

自由主義、能力主義、合理主義の由来、と
その中身の検討。

3-2 自由主義、能力主義、合理主義の現代的意味

たとえば人間の能力の数量化のもつ問題
点、金儲けだけのための合理主義(合理化)がもたらしたもの(医療における金儲け主義)などをみていく。

[4] 現代科学技術のすすむべき道

人間と自然との関係を本来のものに戻すにはどうするか。

価値観をどう変革するか。人間疎外からどの程度解放されたかを価値観の基準とするとどうなるか。

生産と分配の変革、商品や貨幣のもつ意味の研究
人間観、教育観の変革……

これらの事柄を学習する為に、思考の正しいやり方、すなわち認識論の勉強をする。

4-1 武谷三男の三段階論、人類の自然観の変遷
ここでは1973年に筆者等が発表したものを使う⁹

4-2 弁証法について

ものごとを変化の中でとらえ、変化の原因はそのものの内部に主として存在することについてみていく。また変化の原動力としての矛盾についても学ぶ。

4-3 現代の疎外とその克服の道

以上の見方、考え方を用いて現代の諸課題を分析してみる。

例えば、社会を変化のうちにとらえることにより歴史を学ぶ態度を作る。社会変化の原動力は何か、現代社会の矛盾は何か、現在の生産方式が持つ矛盾は何か、公害は何故起るか、戦争は何故起るかというようなことも研究していく。

科学技術の最先端が、人間疎外克服の手段として

使われているかをみていくことも重要である。そのことから現代の核戦略体系のもっている非人間性にも迫っていける。

4 あとがき

以上全くの素案を提示したが、今後グループ内での討論を経てこれを精選していきたい。実際に授業を行う際には次の点を留意したい。

導入は劇的に感性的認識から入れるように。展開と発展は、生徒同志の討論、先生同志の討論、先生と生徒の討論で深めていく。終結は、グループ又は個人で討論結果をまとめる。まとめ方は、劇、マンガ、紙芝居など多様な手段を使う。

注

- ①「ゆとり」の時間を利用した総合学習の展開——中3における総合学習「人間について考える」の試み——その2 1 総合学習研究四年の歩みから」名古屋大学教育学部附属中・高等学校紀要第28集（1983）P27 を参照
- ②「総合教科的学習指導をめざしての一試み——坂田昌一「科学の現代的性格」の指導を中心として——」同上紀要第19集（1973）P108

3. 「ことば」について

白 井 宏

ヒトは、その2本足で立ったとき、自由に使える手を持った。手は火を作り出し、さまざまな道具を作り出した。大地に垂直に立つということは、同時に、重い脳を支え得る力学的構造を得たことにもなる。

2本足に支えられた重い脳は、耳や呼吸器管（唇・歯・舌・咽喉・声帯などが、複雑微妙で多様な発声を可能にしている）と協力して、「叫び」や「うなり」ではない、「ことば」を産み出すことになる。

「ことば」は、感情や知識を他に伝え、また、自身の内部にそれらを蓄積した。弓矢や漁具にも劣らぬ利器として、生活を支え、文明・文化を創造発展させてきた。

「ことば」は、単なる道具ではなく、それ自体が文化になった。「ことば」は、単なる手段ではなく、それ自身が思想や芸術になった。もはや人類は「ことば」のない時代にひき返すことはできない。「ことば」のない生活は考えられない。「ことば」がなければ、それはもはや、人間ではない。

集団の利器として発生した「ことば」は、同時にその集団に対して、ひとつの制度ともなり、規範ともなった。人間と人間を結び絆である「ことば」は、一方呪縛でもある。限りない知の世界を切り拓く鍵であるところの「ことば」は、人間を「ことば」の世界に閉じ込める洞窟でもある。

“ワンワン”という擬声語は、ほんとうの犬の鳴き声を聴く人間の聴力を奪ったかもしれない。“青い”という形容詞は、天空の深遠な美しさを見る人間の眼に眼帯をかけてしまったかもしれない。

「ことば」について考えることによって、あるいは「ことば」を通して、人間の過去・現在・未来について考えてみたい。

1 人間の「ことば」と動物の「ことば」

イルカやミツバチはどんな「ことば」を持っているのか。それら動物の「ことば」と人間の「こと